博士論文要約

モーリス・メルロ＝ポンティの言語哲学
—「客観的思考よりさらに根本的な理解と反省」をめぐって—

佐野泰之

本研究は、二〇世紀フランスの哲学者モーリス・メルロ＝ポンティの思想、とりわけ彼が主著『知覚の現象学』で提起した「客観的思考よりさらに根本的な理解と反省」という概念を、言語についての彼の思索を手がかりに解明するものである。

第一部第一章では、メルロ＝ポンティの処女作『行動の構造』に依拠して、メルロ＝ポンティが批判しようとしていた「自然主義」と「批判主義」という哲学的立場の内実を明らかにしたうえで、彼が同書で構想していた「構造の哲学」の実相を、「ゲシュタルト」や「秩序」、さらに秩序間の「統合」といった概念のうちに探っていった。その過程で、メルロ＝ポンティが「人間的秩序」の本質を「既存の構造を乗り越えて新しい構造を創造する」運動のうちに見て取っていたこと、そして「新しい構造を創造する」能力が、認識の能力と密接な関係をもっているということが明らかになった。「新しい構造を創造する」能力は、人間を物理的秩序や生命的秩序といった下位秩序の支配から脱出させるだけでなく、人間的世界の中に囚われている「始まりつつある知覚」を人間的世界から脱出させ、あらゆる世界内部的な拘束を免れた純粋な意識、純粋な認識主観にまで至らせる。あらゆる実在を意識の構成物ないし意識にとっての対象とみなす批判主義の見解は、このような脱出の能力のうちにその根拠をもっているのである。

しかしメルロ＝ポンティは、批判主義は認識のいわば終着点から自分を純粋な意識として規定することで、自分がこれまで踏破してきた統合の道程を忘却してしまっていると批判する。メルロ＝ポンティは代わりに、心身問題という哲学の伝統的問題を「統合」の観点から捉え直すことを提案する。メルロ＝ポンティの考えでは、「身体」と伝統的に呼ばれてきたものとは、統合のさまざまな下位段階を経て構成されてきた「既得の弁証法的地盤」のことであり、「心」と伝統的に呼ばれてきたものとは、そのような地盤を統合している上位秩序のことである。この観点からすれば、心と身体を別々の実体とみなす必要はない。心身の二元性は統合のあらゆる段階において決して消え去ることはないが、それは心と身体が

別々の実体だからではなく、上位秩序としての心が下位秩序としての身体を完全に統合することができず、浮沈と動揺を絶えず繰り返しているからである。ここから、心と身体、上位秩序と下位秩序の間の葛藤を高次の統合によって調停するという課題が人間に常に課されることになる。人間存在を意識として規定する見解の誤りは、このように一時的・暫定的なものにすぎない高次の統合を永遠化・絶対化するところに存する。

第一部第二章および第三章では、上記のようなメルロ＝ポンティの人間観を『知覚の現象学』の叙述に依拠してさらに深めていくことが目指された。まず第二章では、『知覚の現象学』第一部の身体論を読解しながら、身体というものが、われわれの発意に先立ってわれわれの行為の足場となるような「状況」をわれわれの周囲に展開する機能と、身体がすでに展開している所与の状況を乗り越えて新しい「状況」を構築する機能という二つの機能を同時に担っているということ、これらの機能は健常者においては弁証法的に作用し合って『行動の構造』で記述されたような「既存の構造を乗り越えて新しい構造を創造する」活動を可能にしていることを確かめ、二つの機能をそれぞれ状況への「居住」の機能と状況からの「脱出」の機能として定義した。さらに、われわれはこの「居住」と「脱出」という人間の身体の二つの機能が、「世界内存在」と「対自存在」という人間存在の両義的構造と重なり合っているということを確かめた。

第一部第三章では、『知覚の現象学』の議論が、人間存在のこの両義的構造を最終的に時間の両義的運動によって基礎づけようとしているということを確かめたうえで、時間の問題に関するメルロ＝ポンティの見解を、時間の問題に関連する同書の全議論を綜合することで明らかにした。メルロ＝ポンティの考えでは、時間は、「流れる」というただ一つの運動によって、現在を経験の「次元」に変えて保持するという運動と、そのような「次元」を見えるようにする距離を生み出す自己からの遠ざかりという脱自的運動を一挙に成し遂げる。第一章で見た心と身体の緊張や、第二章で見た居住と脱出の機能は、ともにこの時間の運動によって基礎づけられているのである。それゆえ、時間はわれわれの経験のあらゆる矛盾を基礎づける「根底的矛盾」なのだ。

この章ではさらに、メルロ＝ポンティが時間という「根底的矛盾」によって経験のあらゆる矛盾を説明するだけでは満足していないということを指摘した。経験が時間という「根底的矛盾」によって支えられているという事実は、われわれが矛盾に翻弄されるばかりでそれをただ甘受するしかない、ということを意味しない。この矛盾を自覚し、我がものとするこ

とで、人間は時間をさらなる高次の統合へともたらし、矛盾を（ある意味で）超克するのである。その方法を理解するための手がかりを、われわれはメルロ＝ポンティが『知覚の現象学』で「客観的思考よりさらに根本的な理解と反省」、あるいは端的に「根本的反省」と呼んでいるもののうちに求めた。反省する主観を反省する対象から切り離し、そうすることで主観を世界を絶した絶対的意識たらしめてしまう主知主義的反省に対して、根本的反省は自分が生成してきた道のりを、自分が一個の生成であるという事実まで含めて自覚するある独特の行為である。

第二部の探求は、この根本的反省の具体像をメルロ＝ポンティの文学論のうちに探るという作業に捧げられた。まず第一章で、われわれは四〇年代後半に書かれた「形而上学」をめぐる二つの論考「小説と形而上学」と「人間の内なる形而上学」を瞥見し、メルロ＝ポンティが「形而上学」と呼ぶ営みが、時間という「根底的矛盾」に由来する身体と精神、社会と個人の葛藤を調停する営みであること、そしてその営みが「哲学的意識化」として、『知覚の現象学』で根本的反省と呼ばれている営みと同一の平面に位置づけられていることを確認した。

さらにわれわれは、サルトルの『文学とは何か』に対するメルロ＝ポンティのいくつかのコメントを確認し、文学の参加（アンガジュマン）というサルトルの主張に対して、メルロ＝ポンティが離脱（デガジュマン）を通した参加（アンガジュマン）という独特の見解をもっていたこと、そしてそれが一九五二‐五三年度のコレージュ・ド・フランス講義「言語の文学的用法の研究」の中で「書くこと」と「生きること」の問題として探求されているという見通しを提示した。

第二部第二章および第三章では、以上のような見通しのもとで、「言語の文学的用法の研究」の講義準備ノートの読解を遂行した。第二章では講義第一部のヴァレリー論を、第三章では講義第二部のスタンダール論をそれぞれ読解した。これらの読解作業を通してわれわれが明らかにしたのは、ヴァレリーとスタンダールの文学実践が、まさしくわれわれの見通し通り、身体と精神、感受性と知性、対他存在と対自存在の間の葛藤を調停する企てであるということ、そしてその企ての中で、言葉が、あるいはより端的には語るという行為が本質的な役割を果たしているということである。作家は、ヴァレリーのカイエやスタンダールの日記に見られるような語りの長い修練を通して語りの「巧みさ（dextérité）」を構成することによって身体と精神の合致を感得し、知覚や感情といった作家の主観性に属する経験を言葉の秩序の中に移し入れ、他者へと伝達することによって、語りの成功のさらなる確証を得

るとともに、対他存在と対自存在の間の葛藤をも調停する。

しかしながら、この合致や調停の体験は、純粋に個人の内部で完結する体験ではない。書くという行為はしばしば作家の意図を超えたものを表現してしまうものであるし、さらにまた、読者の反応が作家に与えてくれるのも、あくまで表現の成功の間接的で推定的な確証でしかない。その意味では、肉体と精神の葛藤は純粋な精神的企図が目指していたのとは別のところで調停されるのであり、対他存在と対自存在の葛藤は純粋な個人の意識の及ばぬところで調停されるのである。それは、自己からの脱出による自己との合致である。もし「根本的反省」がこのような営みであるとしたら、われわれは哲学そのものを、もはや伝統的な「観照」のイメージが想起させるような無為な瞑想のごときものとしてではなく、まさしくわれわれ個々人の生の只中で、自己と対峙し、他者と対峙し、世界と対峙し、それらとの間に新たな調和的関係を築き上げていくような実践的営みとみなさねばならなくなるだろう。このように、メルロ＝ポンティの文学論は哲学そのものを刷新する可能性を秘めているのである。